

# オホーツクの農業2021

*Agriculture in Okhotsk*

## (目次)

I	オホーツクの概要	1
II	オホーツクの農業の概要	3
III	農業構造	5
IV	農業の担い手	8
V	農産	14
VI	酪農・畜産	23
VII	食の安全・安心、付加価値向上	26
VIII	加工	29
IX	農業農村整備事業	32
X	農業関係機関	34
XI	農業関係団体	36
XII	オホーツク総合振興局農業関係部署の概要	38



## トピックス

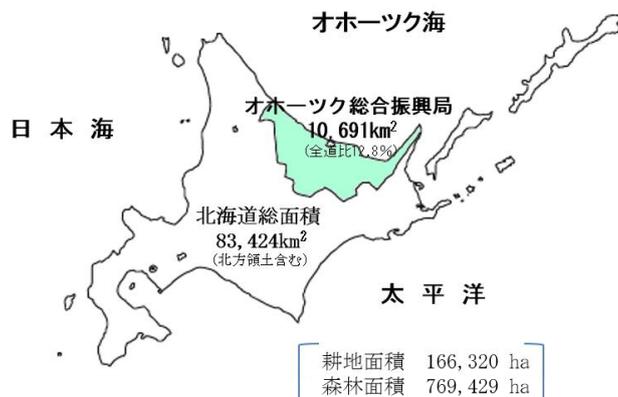
- ① オホーツクスマート農業 2022 の開催 7
- ② 退職自衛官の農業分野における現場体験会の開催 12
- ③ オホーツク TMR センター連絡会「良質サイレージづくり研修会」の開催 13
- ④ オホーツクの農業・農畜産物P R スタンプラリーの開催 31

# I オホーツクの概要

## 1 位 置

オホーツク地域（オホーツク総合振興局管内）は、北海道の北東部に位置し、オホーツク海と280kmの海岸線で接しており、南北に約80km、東西に約200kmの広がりがあります。総面積は10,691km<sup>2</sup>（秋田県に匹敵）と全道の12.8%を占め、宗谷・上川・十勝・釧路・根室の各総合振興局・振興局と境界を接しています。

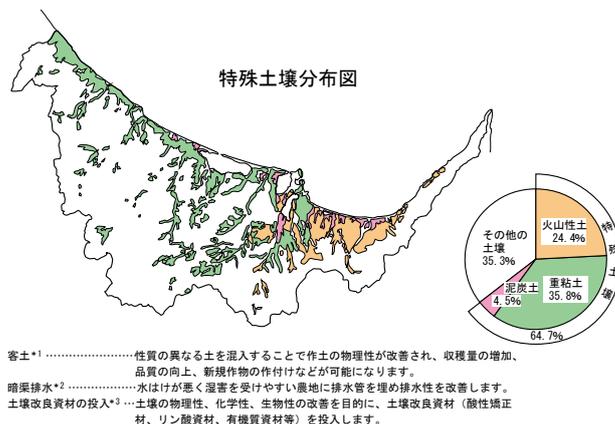
管内は、比較的なだらかな起伏に富み、オホーツク海岸部から南西及び南東に向かって標高が段階的に上昇しています。オホーツク海沿岸部には平地が多く、海岸から平行して低地・台地・丘陵地・山地という基本的な配列となっています。



## 2 土 壤

管内は、道内で最も多様な農地の土壌種類が分布している地域であり、特殊土壌と呼ばれる泥炭土、火山性土及び重粘土が大半を占めています。

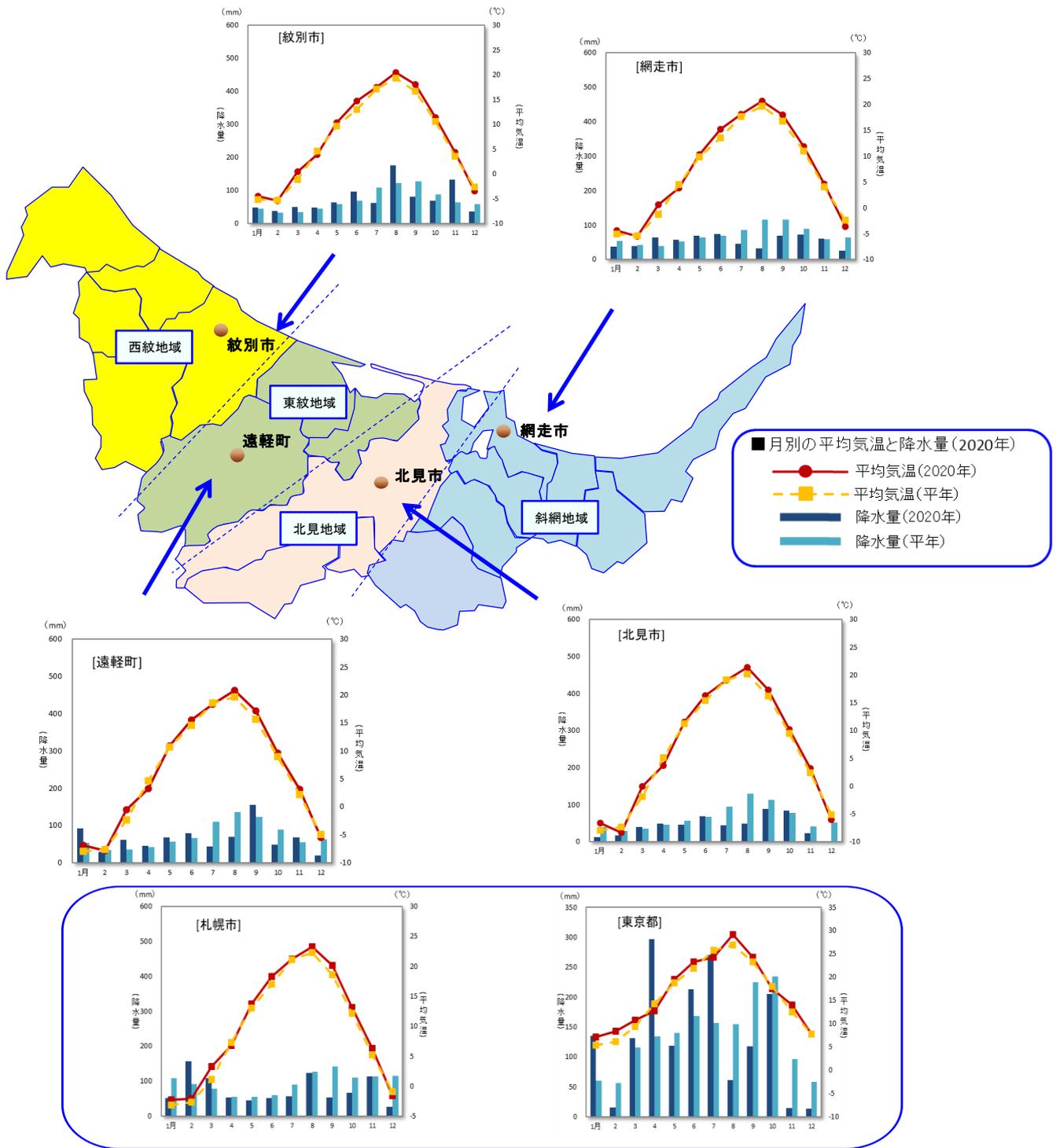
これらの特殊土壌は冷涼な気候とともに作付作物を制限し、生産性を低下させる大きな要因となってきましたが、主に戦後になってからは、客土<sup>\*1</sup>、暗渠排水<sup>\*2</sup>、土壌改良資材の投入<sup>\*3</sup>等、農地を改良する努力が続けられ、その結果、近年では、まだまだ改良の余地があるものの他の地域に劣らない生産性の高い農業が営まれています。地域別に見ると、網走・北見・置戸を結ぶ線の西側が重粘土地帯、東側が火山性土地帯に大別され、地下水位が高い低地に泥炭土が散在している形態となっています。



## 3 気 象

管内の平均気温は5～6度で、道内では宗谷、根室地方に次いで低くなっていますが、農耕期間の気温は15～16度とこれらの地域より高く、畑作を中心とした低温に適応する農作物の生産が可能で、積算気温が比較的高い内陸部では、稲作が営まれているところもあります。しかし、気象の変動が大きく、オホーツク海高気圧の出現などによって極端な低温や日照不足による度々の冷害、遅霜（平年終霜5月10日前後・平年初霜10月20日前後）、また春先の強い南西風による風害など、農業にとって厳しい気象条件下にあります。年間の降水量は、600～800mmで、全道で最も少ない地域となっており、積雪量は70cm前後で全道的に少ない地域となっています。

令和2年は平年と比べて融雪が早く進んだことから、耕起作業は平年よりやや早く進み、てん菜の移植や馬鈴しょの植付作業はおおむね平年並に終了しました。5月後半から6月前半にかけては好天に恵まれ気温が高く推移したことから初期生育は順調に進み、6月後半は平年より気温が低く日照が少なかったものの、生育に大きな遅れは見られませんでした。7月から8月にかけては、気温の高い日が続き、降水量が少なかったことから、一部の作物で影響が見られました。9月以降は好天に恵まれた日が多く、収穫作業は平年よりやや早く終了しました。収量については、玉ねぎ、てん菜は平年をやや上回り、小麦、馬鈴しょは平年並みとなりました。



## 4 人 口

管内の人口は、昭和 35 年(1960 年)は、約 42 万 5 千人余りでしたが、昭和 50 年代の一時期を除いて減少が続いており、令和 3 年(2021 年)は約 27 万 4 千人と昭和 35 年の 6.4 割程度となっています。

市部と町村部に分けてみると、北見・網走・紋別の三市における人口は、約 17 万 1 千人と管内人口の約 6 割を占めます。

一方、町村部における人口は、約 10 万人となっており、中には平成 28 年(2016 年)から令和 3 年(2021 年)の 5 年間の人口減少率が 12%を超えるところもあるなど、過疎化が進行しています。

また、年齢別人口で見ると、管内の老年人口(65 歳以上人口)は 35.0%となっており、高齢化も進行しています。

## Ⅱ オホーツクの農業の概要

### 1 北海道農業に占めるオホーツク農業の割合

区 分 (単 位)	オホーツク	北海道	対北海道比 (%)	調査年次
耕地面積 (ha)	165,600	1,143,000	14.5	R3
田 (ha)	1,614	222,000	0.7	R3
畑 (ha)	164,070	920,700	17.8	R3
農家戸数 (戸)	3,958	37,594	10.5	R2
販売農家 (戸)	3,632	38,086	9.5	R2
作付面積				
水稻 (ha)	962	102,300	0.9	R2
小麦 (ha)	28,300	122,200	23.2	R2
大麦 (ha)	1,310	1,760	74.4	R2
てん菜 (ha)	22,800	56,800	40.1	R2
大豆 (ha)	2,800	38,900	7.2	R2
馬鈴しょ (ha)	16,000	48,100	33.3	R2
たまねぎ (ha)	7,925	14,600	54.3	R2
収穫量				
水稻 (t)	5,270	594,400	0.9	R2
小麦 (t)	166,100	629,900	26.4	R2
大麦 (t)	5,980	7,600	78.7	R2
てん菜 (t)	1,592,000	3,912,000	40.7	R2
大豆 (t)	6,450	93,000	6.9	R2
馬鈴しょ (t)	631,400	1,733,000	36.4	R2
たまねぎ (t)	502,570	892,100	56.3	R2
飼養頭羽数				
乳用牛 (頭)	116,736	820,900	14.2	R2
(1戸当たり) (頭)	135.6	137.5	98.6	R2
肉用牛 (頭)	68,531	524,700	13.1	R2
(1戸当たり) (頭)	208.3	205.0	101.6	R2
生乳生産量 (t)	603,134	4,153,714	14.5	R2

資料：農林水産省「耕地面積調査」、「作物統計調査」、「畜産統計調査」、「牛乳乳製品統計調査」  
「農林業センサス」

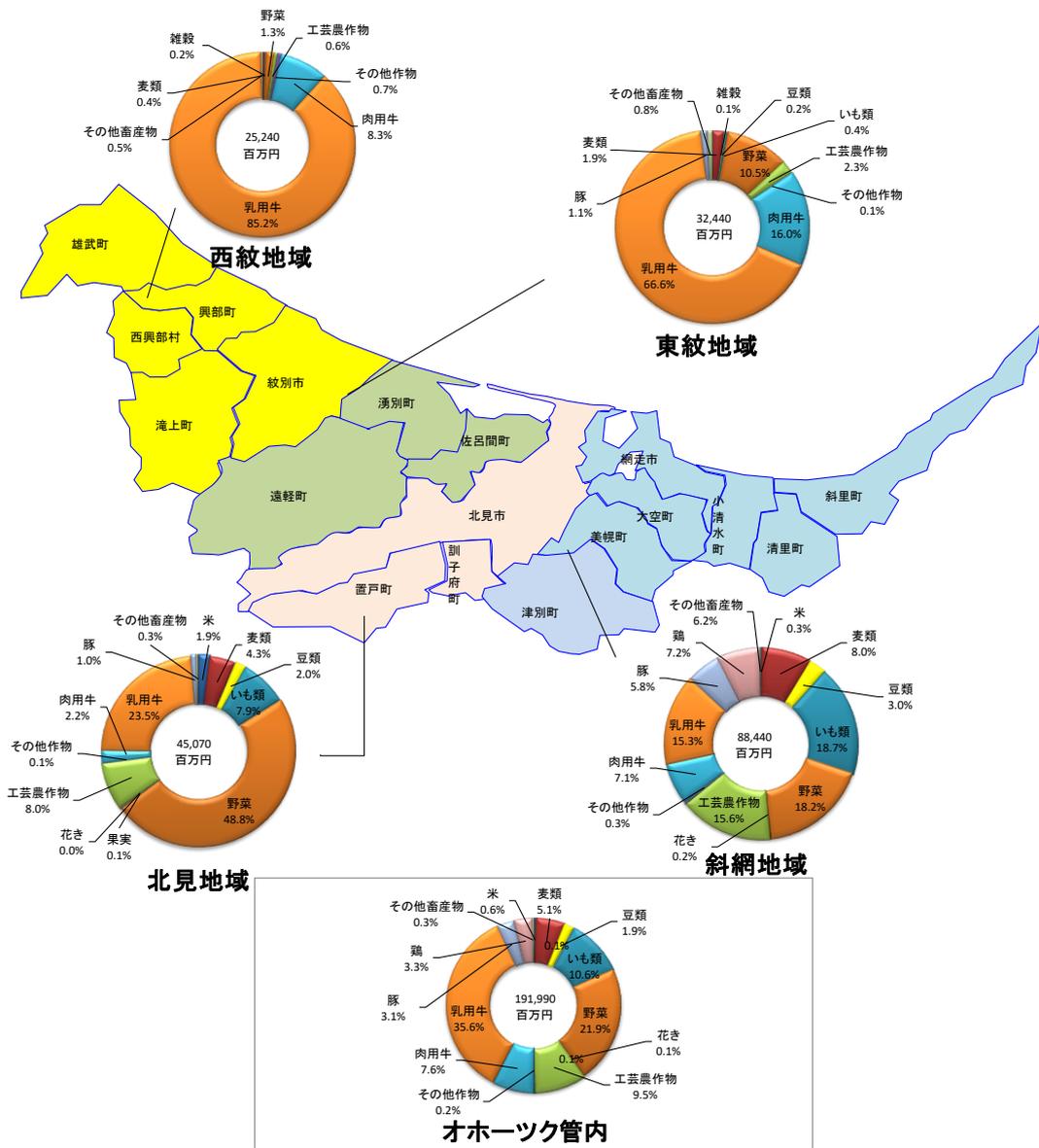
\*一部「オホーツク総合振興局調べ」

### 2 地域別農業の特色

管内は気象条件・土地条件などの自然的条件と経済的条件の違いによって斜網・北見・東紋・西紋の4地域に大別され、それぞれの条件を生かし、地域ごとに特色ある農業が展開されています。

斜網地域 (網走市・大空町・美幌町・津別町・斜里町・清里町・小清水町)	てん菜・馬鈴しょ・麦類を中心に機械化された大規模な畑作農業を展開する地域であり、斜網地域だけで管内農業産出額の耕種部門の59%を占めます。
北見地域 (北見市・訓子府町・置戸町)	たまねぎ等の野菜を基幹として、水稻・酪農などの生産性の高い農業を展開する地域で、特にたまねぎは全道収穫量の42%を占める大産地です。1戸当たり耕地面積は29.2haと狭いものの、10a当り農業産出額では126千円と管内トップです。
東紋地域 (佐呂間町・湧別町・遠軽町)	酪農を基幹として、たまねぎ・かぼちゃ・ブロッコリー・アスパラガス等の野菜や青しそ等の特用作物などに取り組み、工夫をこらした農業を展開する地域です。1戸当たり耕地面積は49.5haと酪農地帯としては狭く、1戸当たり農業産出額は管内平均と同程度です。
西紋地域 (紋別市・滝上町・興部町・西興部村・雄武町)	草地等の土地基盤を活用した大規模な酪農を展開しており、1戸当たり耕地面積は118.5haと管内では最も大きい地域です。農業産出額に占める畜産の割合は96%を超え、1戸当り農業産出額は9千9百万円と管内平均を大きく上回ります。

農業産出額の品目別割合 (令和元年)



地域別農業統計等の比較

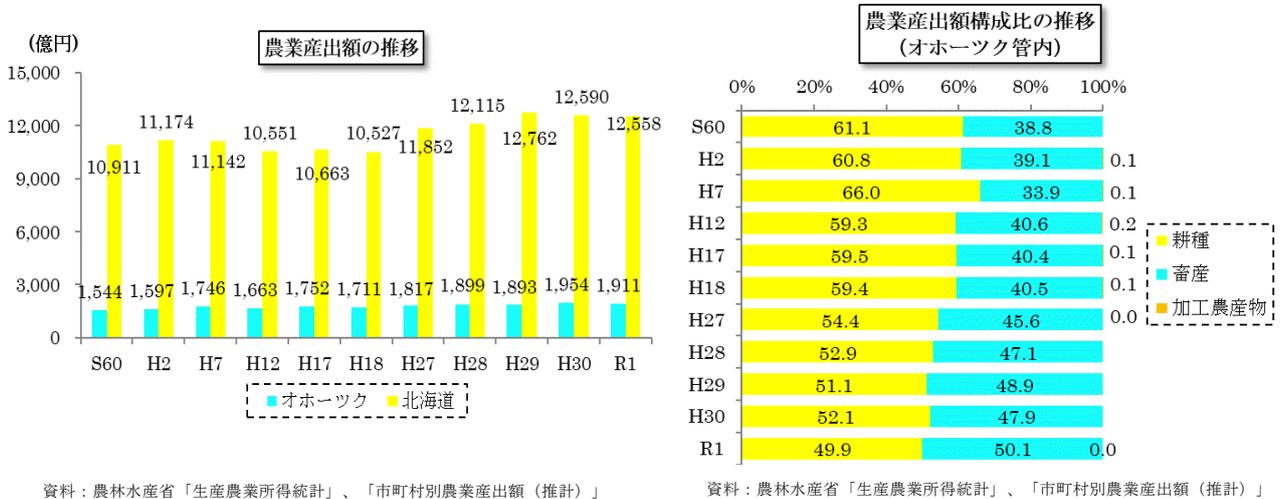
区分	オホーツク総合振興局	斜網地域	北見地域	東紋地域	西紋地域
農 家 戸 数 (R2)	3,958 戸	1,957 戸	1,220 戸	527 戸	254 戸
耕 地 面 積 (R3)	165,600 ha	74,130 ha	35,550 ha	25,880 ha	30,040 ha
1戸当たり耕地面積 (参考)	41.8 ha	37.9 ha	29.1 ha	49.1 ha	118.3 ha
農 業 産 出 額 (R元)	191,190 百万円	88,440 百万円	45,070 百万円	32,440 百万円	25,240 百万円
うち畑作	51,700 百万円	39,840 百万円	9,940 百万円	1,600 百万円	320 百万円
うち酪農	67,780 百万円	13,460 百万円	10,540 百万円	21,550 百万円	22,230 百万円
うち野菜	41,670 百万円	15,990 百万円	21,940 百万円	3,400 百万円	340 百万円
1戸当たり農業産出額 (参考)	48,305 千円	45,192 千円	36,943 千円	61,556 千円	99,370 千円
10a当たり農業産出額 (参考)	115 千円	119 千円	127 千円	125 千円	84 千円

資料：農家戸数/農林水産省「農業センサス」 耕地面積/農林水産省「耕地面積調査」  
 農業産出額/農林水産省「市町村別農業産出額(推計)」  
 1戸当たり耕地面積及び農業産出額、10a当たり農業産出額は上記データから算出

注1)：農業産出額の「うち畑作」は麦類・雑穀・豆類・いも類・工業農作物。  
 注2)：ラウンドの関係で、オホーツク総合振興局と各地域の合計は必ずしも一致しない。

### 3 農業産出額

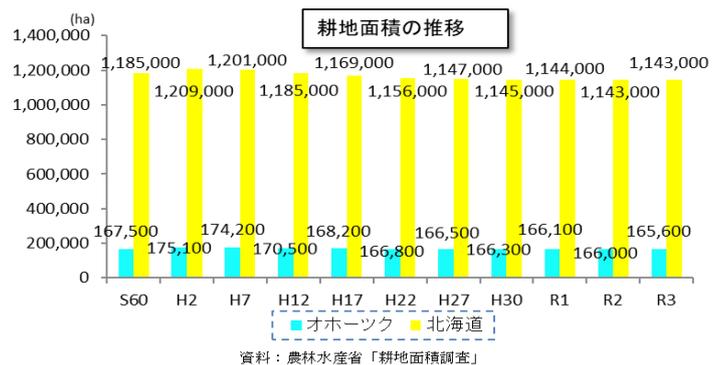
管内の農業産出額は、令和元年（2019年）は1,911億円となりました。農業産出額の構成比は、耕種、畜産ともに約5割となり、畜産は増加傾向で推移しています。



## Ⅲ 農業構造

### 1 耕地面積

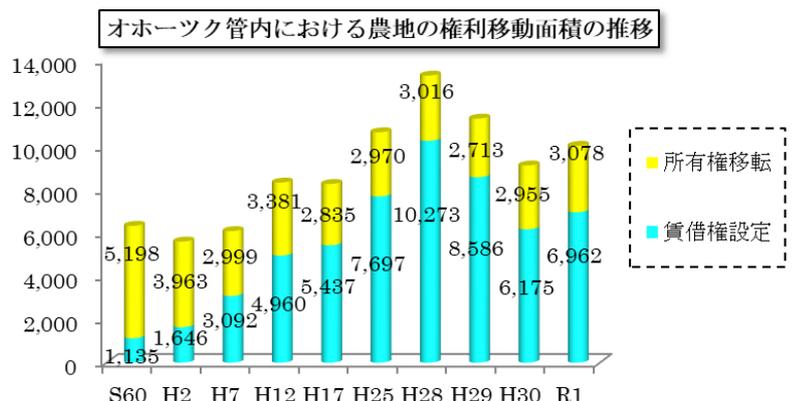
耕地面積は、北海道・管内ともに微減傾向にあります。令和3年（2021年）の管内の耕地面積は165,600haとなっています。



### 2 農地の権利移動

管内における耕作目的の農地の権利移動面積は、平成7年まで横ばいに推移していましたが、平成12年度以降、農地法の改正により農地権利移動の規制が緩和されるとともに、農業経営基盤強化促進法の改正により担い手への農地利用集積に向けた措置が拡充され、平成26年度には農地中間管理事業の推進に関する法律に基づく農地中間管理事業が開始されたことにより、増加傾向で推移してきましたが、担い手への農地の集積率が高まり、平成30年度では権利移動が前年度に比べ減少しています。

このうち、農業経営基盤強化促進法に基づく農地の権利移動が主体となっており、令和元年では全体の約8割を占めています。

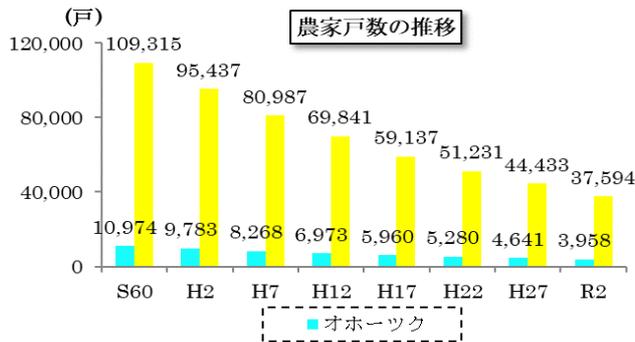


注) 農地の権利移動面積は、農地法第3条、農業経営基盤強化促進法、農地中間管理事業の推進に関する法律に基づく、農地及び採草放牧地の所有権移転面積と賃借権設定面積である。

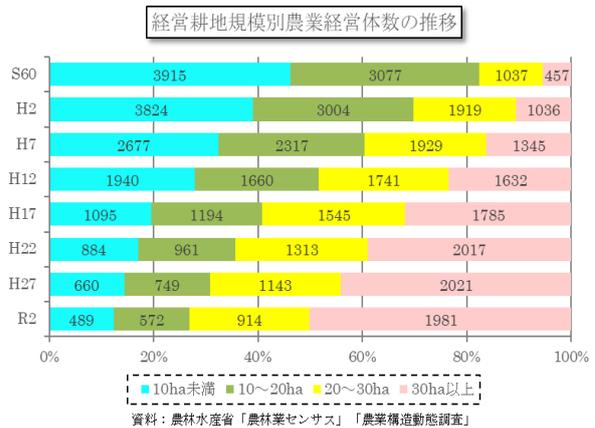
### 3 農家戸数

農家戸数は、北海道・管内ともに減少を続けています。

また、経営耕地面積規模別の農業経営体数の推移を見ると、30ha以上の経営体の割合が、平成22年（2000年）と比べ令和2年（2020年）は、39%から50%になり、経営規模の大きい農家の割合が増加しています。



資料：農林水産省「農林業センサス」「農業構造動態調査」

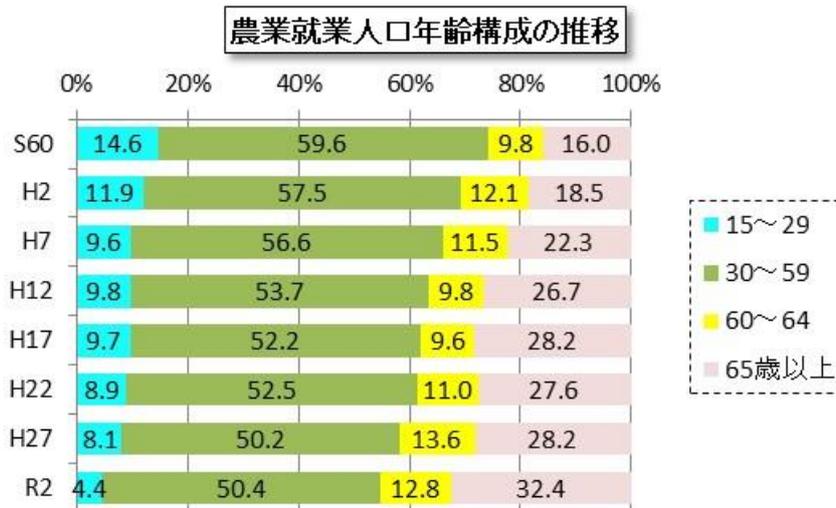


資料：農林水産省「農林業センサス」「農業構造動態調査」

### 4 基幹的農業従事者数

個人経営体の基幹的農業従事者数は、北海道・管内ともに減少を続けています。管内では、令和2年（2020年）は8,800人となり、昭和60年（1985年）の3万2千人と比べ3割以上減少しています。

また、年齢構成は60歳以上が昭和60年以降増え続けていることから、高年齢化が見られ、令和2年（2020年）には60歳以上が45.2%を占めています。



資料：農林水産省「農林業センサス」「農業構造動態調査」



## トピックス① 【オホーツクスマート農業 2022 の開催】

近年、農業の生産現場では、農家戸数の減少やそれに伴う規模拡大が進展する中、労働力不足に対応しながら、生産性の向上を図ることが必要となっています。このような中で、ICTを活用したスマート農業技術に対しては、省力化や作業効率の向上、適切な管理による収量・品質への向上への期待が寄せられています。

オホーツク地域では、このスマート農業技術の導入推進を図るため、農業団体や試験研究機関、普及センター、行政からなる「オホーツクスマート農業推進会議」を平成30年に設置し、以降、毎年スマート農業に関するセミナーを開催してきました。令和2年度はコロナウイルス感染症のため、開催を見送りましたが、令和3年度はリモートというかたちで、2年ぶりとなるオホーツクスマート農業セミナーを令和4年3月に開催しました。

今回は、管内でも農薬防除用などでその利用に広がりが見られる農業用ドローンをセミナーのテーマとしました。農業用ドローンは、降雨後などの大型機械がほ場に入りづらい場合でも農薬散布などの作業が可能となり、適期作業の推進や省力化への効果が期待されます。その一方で、操作技術の習得や近年整備が進んでいる法令面への対応が求められるなど、様々な課題があるところです。

セミナーでは、ドローンをめぐる法制度のほか、ドローンの機種ごとの機能の違いや特徴、具体的な活用事例、ドローン用に利用可能な農薬の登録状況のほか、各作物のドローン防除の試験結果や、今後の展望としてのセンシング技術と連動したピンポイント防除の実証状況など、農業用ドローンをめぐる幅広い情勢について、4名の講師からお話をいただき、当日は100名を超える方に参加をいただきました。

オホーツク管内では、畑作地帯を中心に自動操舵システムの導入が進むなど、スマート農業技術が広く活用されており、今後も管内のスマート農業技術の効果的な導入に向け、技術の紹介や事例の共有などを行っていきます。



オホーツクスマート農業セミナーの様子



講師による農業用ドローンの説明

## IV 農業の担い手

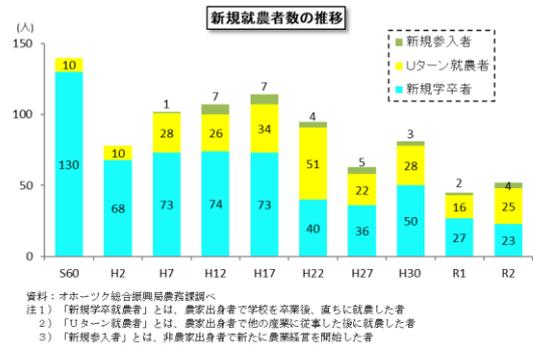
### 1 新規就農者

管内の新規就農者数は、近年、60人程度で推移していましたが、令和元年（2019年）以降は60人を下回っています。（令和2年（2020年）：52人）

新規就農者のうち、「新規学卒就農者」は、平成17年以降は減少傾向で推移し、平成30年に若干回復したものの令和2年（2020年）には23人となり、前年よりも4人減少しました。

「Uターン就農者」は、平成23年頃まで増加傾向（50人前後）でしたが、平成28年以降は30人前後で落ち着いています。また、令和元年（2019年）は16人と直近3カ年で最も少ない人数でしたが、令和2年（2020年）は25人となり、前年よりも9人増加しています。

「新規参入者」は、毎年数名で推移しており、令和2年（2020年）は4人となっています。

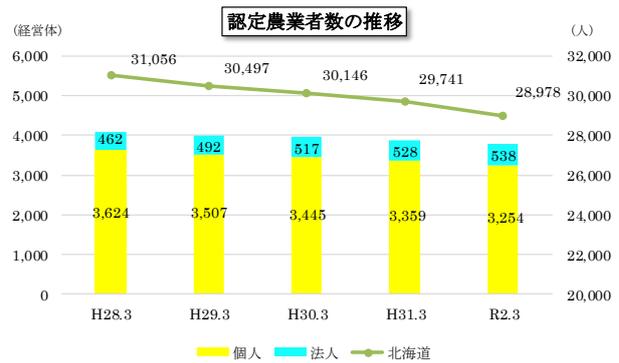


### 2 認定農業者

管内の認定農業者数は、令和2年3月末時点で、3,792経営体となっています。

近年の認定農業者数は、高齢化等を背景に減少傾向で推移していますが、認定農業者のうち法人の数は、前年と比べ、10法人増加し、538法人と年々増加する傾向にあります。

国の農業経営に関する各種施策等は、認定農業者を主とする「担い手」に集中・重点化しています。

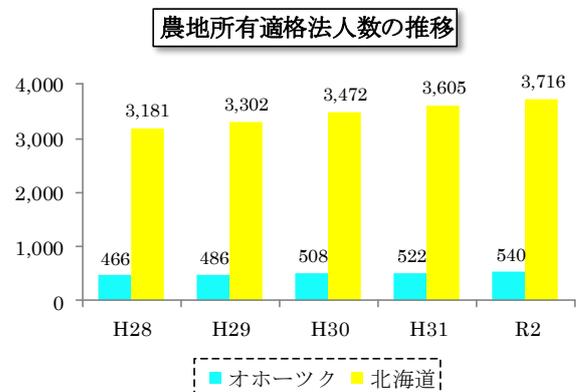


### 3 農地所有適格法人

管内の農地所有適格法人数は、増加傾向にあり、令和2年1月1日時点で540法人となっています。

農業経営の法人化は、家計と経営の分離により経営管理能力や対外信用力が高まるほか、給与制、休日制及び社会保険などの整備により優れた人材を確保しやすく、規模拡大や経営の多角化が容易になるなどのメリットを有しています。

特に近年、複数戸による農地所有適格法人には、地域の中核的な担い手として離農者などの農地や農作業の引き受け手、新規就農者の受け入れとなるなど、公益的機能の発揮が期待されています。



## 4 北海道指導農業士・北海道農業士

本道農業の発展と地域社会の活性化を図るため、次代の農業の担い手の受入・指導や地域農業の振興に対する助言・協力を行う優れた農業者を「北海道指導農業士」として、地域農業の振興等に積極的に参加協力を行う農業者を「北海道農業士」として、それぞれ市町村長の推薦を受けて知事が認定しています。

管内では、令和4年2月現在で、指導農業士121名、農業士217名が認定されています。

## 5 農村女性グループ

管内では、簿記や経営管理の学習、農畜産物の直売や加工など、幅広い農村女性のグループ活動（令和2年3月現在、39グループ）が行われており、農業経営の改善をはじめ、消費者との交流や食文化の伝承など農業・農村への理解促進に貢献しています。

また、平成13年には、各グループの交流を目的としたオホーツク農村女性ネットワーク「kirari ウェルカム」が設立され、交流と学習の場である「農村女性のひろば」の開催など活動の輪が広がっています。

## 6 青年農業者クラブ

20代～30代前半を中心とした青年により構成される青年農業者クラブ（令和3年10月現在、14クラブ）は、交流会や学習会等の活動を通じて、農業経営・技術の向上や仲間づくりなどの自己研鑽のほか、地域農家への新技術の提案、子どもの農業体験指導にも取り組むなど、次代の担い手育成の場となっています。

## 7 地域農業支援システム

経営の規模拡大に伴う過重労働、担い手の減少、農作業従事者の高齢化などに対応し、労働負担を軽減するため、酪農を中心に農作業受託組織（コントラクター）やTMRセンター、酪農ヘルパー組合などの農作業支援組織整備が進められています。

### （1）コントラクター（農作業受託組織）

令和2年に管内で活動しているコントラクターは15組織あり、農業協同組合や株式会社、農事組合法人、営農集団など多様な形態で運営されています。

また、コントラクターでは、牧草や飼料用とうもろこしの収穫をはじめ、堆肥の切り返し・散布・耕起作業、心土破碎、草地更新作業など様々な農作業を請け負い、委託農家の労働力負担の軽減を図っています。

## (2) TMRセンター

TMRセンターは、酪農経営の規模拡大に伴い、飼料生産を外部化して乳牛管理に重点を置いた経営とするため、飼料生産からTMRの調整・供給までを行う組織で、良質粗飼料の安定的な確保を図り、構成する酪農家の経営改善を図ることを主な目的としています。

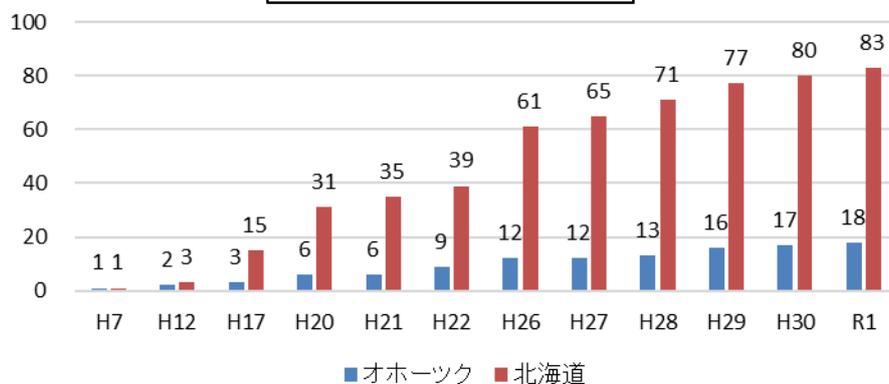
管内には令和3年3月現在、19組織が設立されており、近年増加傾向にあります。

TMRセンターの利用により、飼料の収穫・調製・給与に係る時間の短縮、良質なTMRの供給による1頭当たり乳量の増加など、一定の成果を上げています。

### ■管内TMRセンター一覧

TMRセンター名	開始年	市町村
(有)オコップフィードサービス	平成11年	興部町
(農)東もことTMRセンター	平成15年	大空町
(有)アグリサポートばろう	平成18年	湧別町
(同)K'sフィードサービス	平成19年	訓子府町
(株)西興部グラスフィードファクトリー	平成19年	西興部村
(同)雄勝フィードサービス	平成22年	置戸町
佐呂間町農業協同組合	平成22年	佐呂間町
(同)秋里TMRセンター	平成22年	興部町
(株)ドリームゆうべつ	平成23年	湧別町
(株)こしみずエコフィードサービス	平成24年	小清水町
(有)だいち	平成25年	津別町
(農)瑞穂	平成27年	北見市
(同)ほっくんフィードセンター	平成27年	訓子府町
(株)オホーツクTMRセンター	平成27年	興部町
(同)Dream Feed Kitami	平成29年	北見市
(同)温根湯サイレンジサービス	平成29年	北見市
(同)上置戸フィードサービス	平成30年	置戸町
U2デーリィコンシェル(株)	平成30年	興部町
(株)沙留TMRセンター	平成30年	興部町

TMRセンター組織数の推移



資料:オホーツク総合振興局農務課調べ

※R2年の全道データは集計中のため、掲載していない。

### (3) 酪農ヘルパー利用組合

酪農ヘルパー利用組合は、酪農経営の厳しい労働条件を緩和し、定期的に休日を確保したり、病気・事故の際に、酪農家に代わって搾乳などの飼養管理を行うヘルパーを派遣する組織です。

管内では全市町村で16組合が組織され、利用組合参加率は95.3%となっています。

また、1戸あたり年間利用日数は28.5日と、前年に比べ1.9日増加しています。

#### ■酪農ヘルパー事業の実施状況（令和2年8月1日現在）

	組合数	専任ヘルパー数 (人)	加入農家戸数 (戸)	加入率 (%)	1戸当たり年間 利用日数※
オホーツク総合振興局	16	88	715	95.3%	28.5
北海道	86	491	4,875	92.1%	23.8

資料：(社)酪農ヘルパー全国協会調べ

※ 令和元年度の利用日数

### (4) 哺育・育成センター

哺育・育成センターは、酪農経営の規模拡大に伴い、哺育・育成部門を外部化して乳牛管理に重点を置いた経営とするため、哺育・育成業務を行う組織で、構成する酪農家の労働負担軽減を図ることを主な目的としています。

管内では個人での哺育・育成受入経営体も合わせて、8か所で組織されています。

#### ■哺育・育成センター設置状況（令和2年度）

区 分	哺育・育成 受託箇所数	利用戸数（戸）	頭数規模（頭）
オホーツク総合振興局	8	125	4,437
北海道	84	969	34,403

資料：オホーツク総合振興局農務課調べ

## トピックス②【退職自衛官の農業分野における現場体験会の開催】

道では、農業現場において不足している雇用労働力の確保が課題となっていることから、多様な人材の農業参画を図るため、令和元年度から農業経営確立支援事業を実施し、雇用促進に向けた取組みを進めているところです。

そこで、当振興局では、55歳前後で定年を迎える自衛官の方に着目し、再就職先として農業を紹介する取組みとして、「退職自衛官の農業分野における現場体験会」（農業インターンシップ）を令和3年（2021年）11月24日（水）に開催しました。

当日は、自衛隊美幌駐屯地の隊員4名が参加し、（株）北海道畜産公社北見工場、美幌町農業協同組合コントラクター課、美幌地方広域農業協同組合連合会で、会社概要や業務内容の説明を聞き、工場・施設内等の見学をしていただきました。

参加した隊員へのアンケート結果では、「見学を通して、企業の仕組みを知ることができ、就職に対して意識が変わった。」「とても良かった。」などの意見をいただき、農業分野を選択肢の一つとして検討したいとの回答をいただきました。

引き続き、農業現場における雇用労働力の確保に向け、関係機関と連携し取り組んでまいります。





### トピックス③【オホーツク TMR センター連絡会「良質サイレージづくり研修会」の開催】

オホーツク管内TMRセンター連絡会は、管内のTMRセンターの代表者や構成員の情報交換等を行う場を設け、経営技術の向上や連携強化を目的として平成28年に設立されました。

令和3年11月には、TMRセンター構成員の情報交換と連携を深めることでTMRセンター運営に資することを目的として、「良質サイレージづくり研修会」が北見市で開催されました。当日は、TMRセンター構成員、農業団体ほか行政職員等、約50名の参加がありました。

研修会では、網走農業改良普及センター遠軽支所の植村主査から、令和元年度産牧草サイレージについて、分析項目ごとにデータとりまとめ結果の報告がありました。サイレージの発酵品質評価方法であるVスコア項目では、サンプルの8割以上が良質とされる値（80%以上）を示しました。

また、管内TMRセンター7箇所の一歩牧草サイレージについて、参加者が実際に手触りや匂いから評価を行う、サイレージ品質評価を行ったほか、参加者間での技術的な情報共有を図りました。



令和元年度産牧草サイレージ分析値について



サイレージ品質評価

# V 農 産

## 1 稲 作

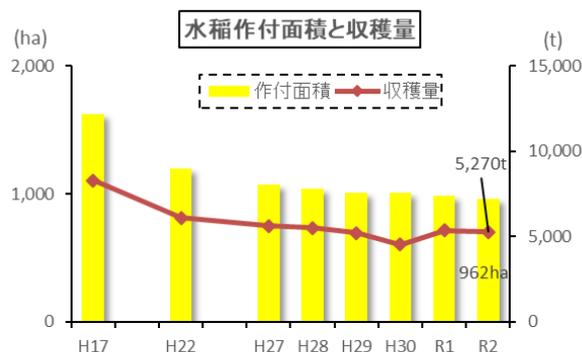
オホーツク地域は、水稻生育上、厳しい気象条件であることから、他作物への転換が進み、水稻の作付面積は減少傾向が続いている一方で、冷涼な気候を活かしたもち米の産地が形成されています。

オホーツク管内の令和2年産の水稻作付面積は962haと、前年から約20ha減少しました。生育は、4月から5月は好天の日が多かったことから、出芽後の生育は良好となり、移植作業及び活着は平年並みとなりました。6月上旬は高めの気温となり分けつは進み、7月下旬の低温により出穂にばらつきが生じたものの、その後の好天により登熟は進み、収穫は平年よりやや早く終了しました。

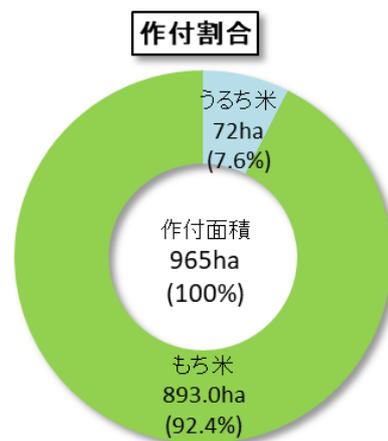
穂数、総粒数、稔実歩合は平年並み、千粒重は平年よりやや軽くなりましたが、登熟歩合が平年より高く、製品数量は平年より多くなりました。収穫量も5,270トンと前年から約80トン減少していますが、オホーツク・十勝地区の作況指数は「107」と2年連続の良となり、全道平均の106も上回りました。

オホーツク地域の水稲の作付はもち米が主体であり、もち・うるちの割合は、令和2年産では、もち米が92.4%、うるち米が7.6%となりました。

管内のもち米の品種は、平成21年に北海道優良品種に認定された耐冷性に優れる「きたゆきもち」に全面的に切り替わっており、品種別での生産量は道内一、もち米全体でも上川管内に次ぐ第2位の産地となっています。



資料: 農林水産省「作物統計調査」



資料: 北海道農政部調べ

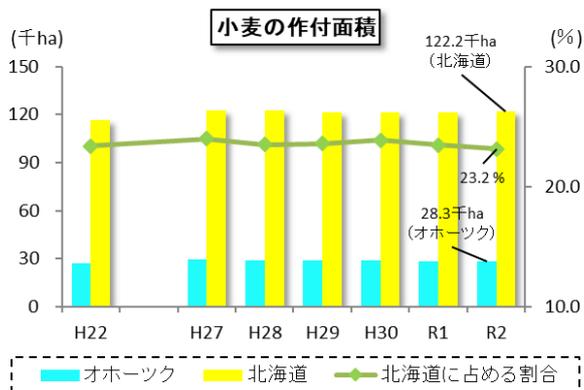
## 2 畑 作

### (1) 麦類

小麦は、輪作体系上の基幹作物であり、令和2年産の管内の作付面積は28,300haとほぼ横ばいで推移し、全道小麦作付面積に占める割合は23.2%となっています。

令和2年産の生育は、6月中下旬に寡照傾向となったものの、全体に落ち着いた気象経過であったことから、概ね平年どおりに進み、収穫は平年よりやや早く終わりました。

秋まき小麦では一穂粒数は平年並で、千粒重はやや重く、穂数も多く平年を上回り、小麦全体では、10a当たりの収量は586kg、収穫量は166,100tとなりました。

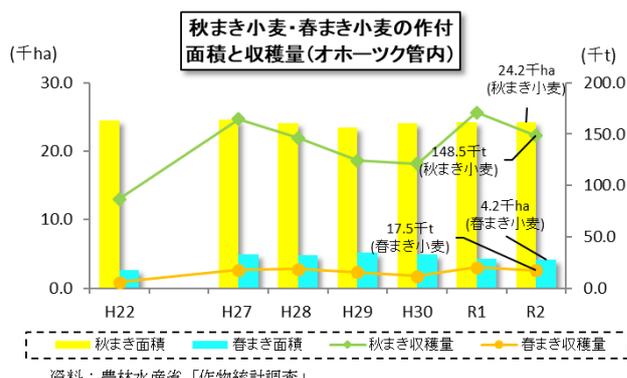


資料：農林水産省「作物統計調査」

### ○秋まき小麦

令和2年産の作付面積は24,200haで、前年と同等の面積となりました。収穫量は148,500tと、豊作年であった前年に比べ22,700t減少しましたが、平年を上回る収量となりました。10a当たりの収量は615tと前年の708tを下回りましたが、全道平均(540t)では上回っています。

品種は日本めん用の「きたほなみ」が主であり、一部地域では超強力系小麦の「ゆめちから」なども作付けされています。



資料：農林水産省「作物統計調査」

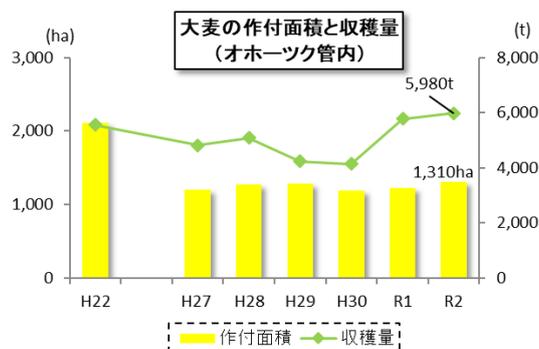
### ○春まき小麦

令和2年産の作付面積は4,190haで、前年に比べて150ha減少しました。収穫量は17,500tと前年に比べ2,900t減少していますが、平年をやや上回る収量となりました。10a当たりの収量は419kgでした。品種はパン・中華めん用の「春よ恋」が主であり、北見地域及び斜網地域を中心に作付けされています。

### ○大麦

令和2年産の大麦の作付面積は1,310haと前年から90ha、収穫量は5,980トンと前年から200トン、それぞれ増加しました。10a当たり収量は456kgとなり、前年を上回りました。

管内では、ビールの原料となる二条大麦が作付けされており、ほぼ全量が契約栽培となっています。北海道全体の約7割がオホーツク管内で作付けされており、主な品種は「札育2号」となっています。



資料：農林水産省「作物統計調査」

## (2) 馬鈴しょ

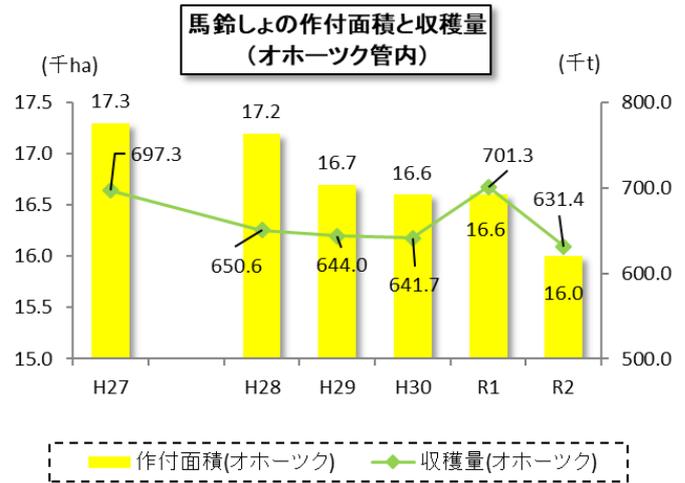
馬鈴しょ生産は、生産者の高齢化や経営規模の拡大に伴う労働力不足、他品目への作付転換等により、減少傾向にあります。

その中で管内の馬鈴しょは、令和2年産の全道の作付面積の約3割、収穫量の4割近くを占めており、面積、収穫量ともに4割以上を占める十勝地方に次いで、本道における主要な産地となっています。

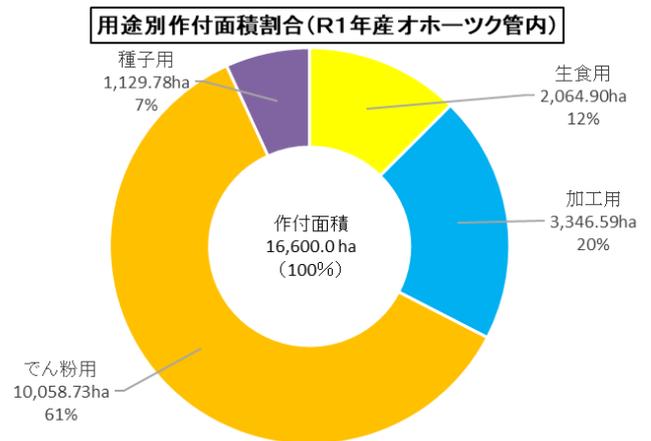
令和2年産の作付面積は、前年から600ha減少し16,000haとなり、収穫量については、平年を上回る収量となった前年から69,900t減少の631,400tとなりました。

用途別に見ると、でん粉原料用の作付面積割合が高いことが管内の特徴で、令和元年産は全面積の約6割を占めており、管内の5工場（農協系4工場、商系1工場：令和2年産時点）ででん粉生産がおこなわれています。

なお、馬鈴しょの生産に重大な影響を与える害虫である「ジャガイモシストセンチュウ」は、管内では、昭和52年（1977年）に初めて発生が確認されて以降、その発生が確認され続けています。そのまん延を防止対策として、でん粉原料用品種を中心に抵抗性品種の作付が進んでおり、「コナヒメ」や「コナユタカ」の作付面積が増加傾向にあります。



資料：農林水産省「作物統計調査」



資料：北海道農政生産振興局農産振興課調べ  
注：主要品種（全道で500ha以上の品種）のみ集計

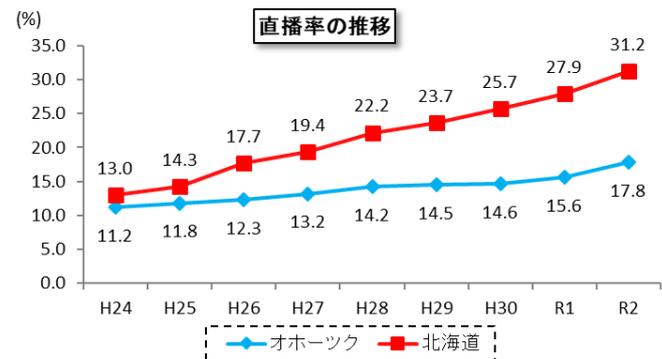
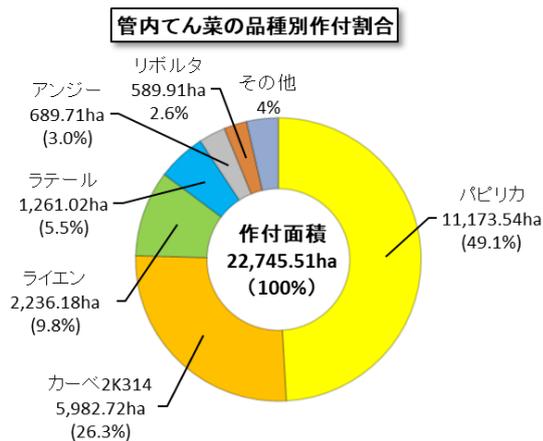
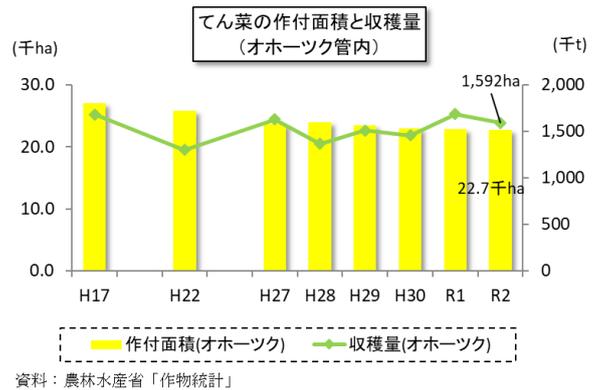
### (3) てん菜

砂糖の原料となるてん菜は、畑作の基幹的な輪作作物となっており、令和2年産の作付面積は約22,750haと前年に比べ50ha減少、収穫量は約159万tと前年に比べ10万tの減収となりました。作付面積は全道の約4割で、十勝管内に次ぐ規模となっています。

10a当たり収量は6,999kg/10aと平年を上回りましたが、豊作年であった前年に比べ447kg/10a減少しました。平均糖分については、8月から9月にかけての気温が平年より高かったことなどが影響し、前年より0.3%低い16.7%となりました。

品種は出荷する製糖工場によって異なっていますが、高糖分・病害虫抵抗性の品種が広く作付されています。

てん菜の栽培方法のうち直播栽培については、移植栽培と比べて収量性が劣る一方、経営面積の拡大が進む中、作業の軽減が図られる栽培方法として、北見地域や東紋地域を中心に拡大が見られます。令和2年には管内のてん菜作付面積の17.8%が直播栽培となっています。



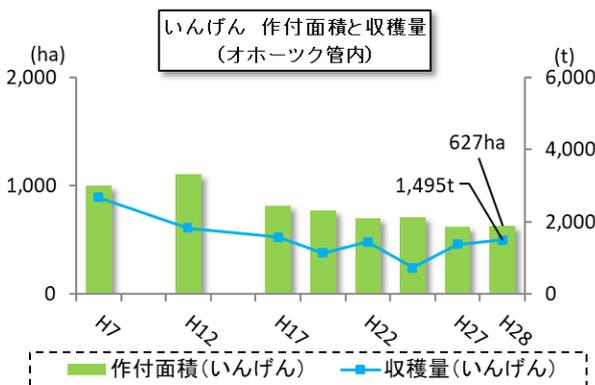
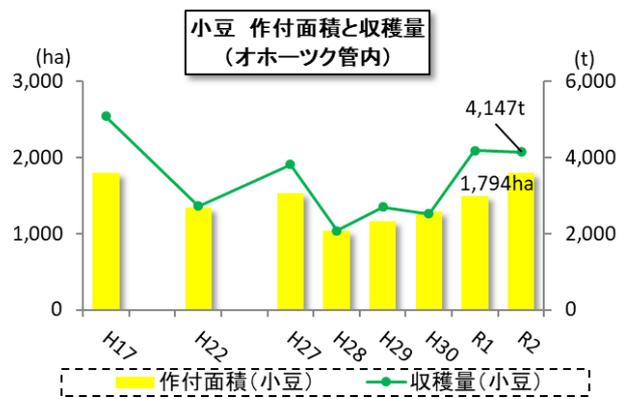
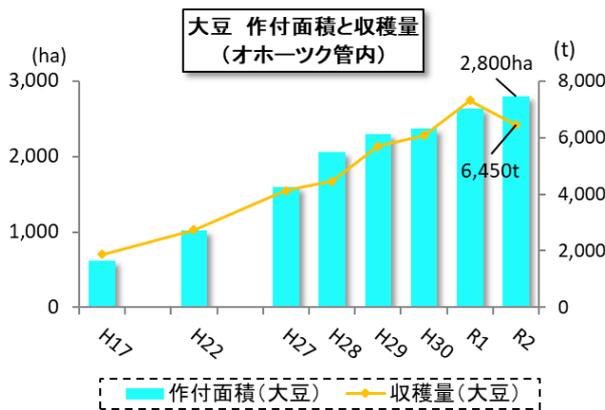
資料：北海道農政部生産振興局農産振興課調べ。  
品種別面積は作付統計調査と一致しない。

#### (4) 豆類

大豆を含む豆類は、適正な輪作体系を維持する上で重要な作物となっています。冷涼な気候のオホーツク管内では収量が不安定であったため、作柄が安定している小麦等に転換されてきましたが、管内に適した大豆品種が育成されたことなどにより作付は近年増えており、令和2年産の大豆の作付面積は約2,800ha、収穫量は約6,500トンとなっています。10a当たり収量は230kgと、全道平均(239kg)とほぼ同等となっています。

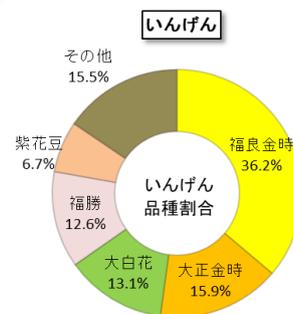
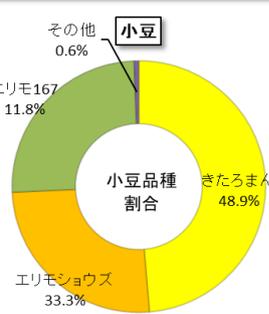
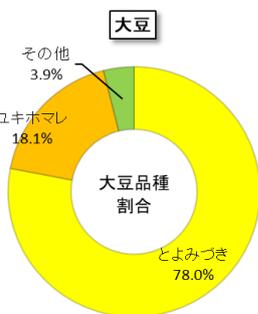
小豆は作付面積や収穫量の変動が大きくなっていますが、平成28年産から作付面積は増加傾向にあり、令和2年産の作付面積は約1,800ha、収穫量は約4,100トンとなっています。

オホーツク管内におけるいんげんの作付面積627haと全道の1割弱となっています。このうち、大青花豆などの高級菜豆は、主に北見市において生産されており、全道の作付面積の約65%を占め、全道一の産地となっています。



資料：大豆は農林水産省「作物統計調査」  
小豆・いんげんは平成18年産までは「作物統計調査」、平成19年産以降はオホーツク総合振興局調べ

管内主要品種作付面積割合(令和2年産)



資料：オホーツク総合振興局農務課調べ

### 3 園 芸

#### (1) 野菜

野菜類は、高収益作物として各地域で農業経営の中に取り入れられており、管内の令和2年産の作付面積は10,272haとなっています。作付割合は、たまねぎなどの葉茎菜類が74.3%、にんじんなどの根菜類が13.6%、スイートコーンやかぼちゃなどの果菜類が12.0%、メロンなどの果実的野菜類が0.1%となっています。

品目別の作付面積は、管内の主要な作物であるたまねぎが最も多く7,396.8haと全体の72.0%を占めており、次いでにんじん1,094.3ha、スイートコーン707.1ha、かぼちゃ520.1haとなっています。

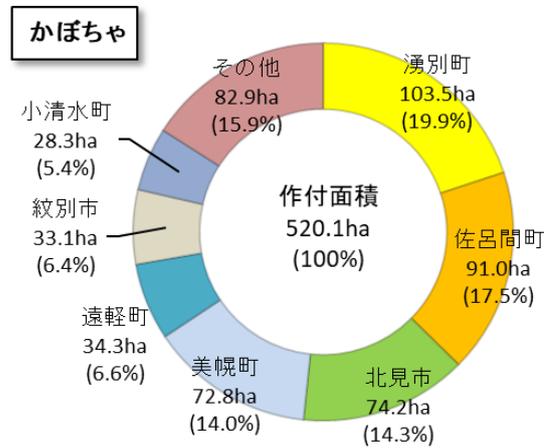
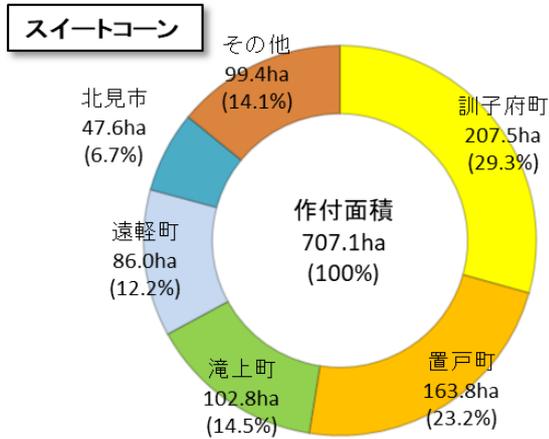
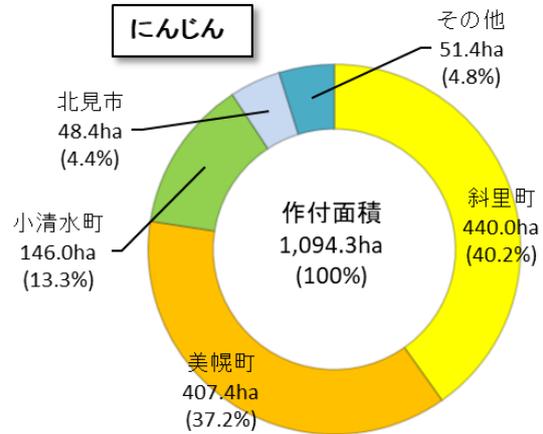
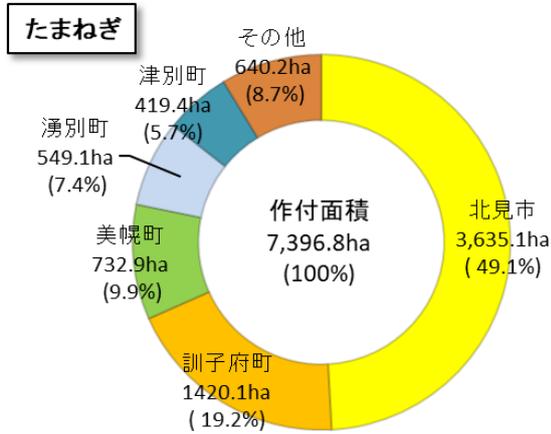
地域別の作付面積では、北見市、訓子府町などの北見地域ではたまねぎ、湧別町、佐呂間町などの遠紋地域ではかぼちゃ、斜里町、美幌町などの斜網地域ではにんじんが多く、地域の特性を活かした産地が形成されています。

管内野菜作付面積と収穫量

	作 付 面 積 (ha)			収 穫 量 (t)		
	R1	R2	前年比 (%)	R1	R2	前年比 (%)
たまねぎ	7,325.0	7,396.8	101.0	441,808.0	471,164.3	106.6
はくさい	28.2	25.7	91.1	1,586.2	1,394.8	87.9
キャベツ	60.9	53.1	87.2	2,941.0	2,671.1	90.8
アスパラガス	44.6	41.7	93.5	104.4	119.5	114.5
ブロッコリー	89.1	80.3	90.1	676.6	104.0	15.4
ほうれんそう	5.0	2.6	52.0	111.3	41.9	37.6
レタス	3.0	3.0	100.0	85.0	104.0	122.4
ねぎ	6.1	6.3	103.3	283.4	288.5	101.8
その他	34.9	24.4	69.9	163.3	120.9	74.0
葉茎菜類計	7,596.8	7,633.9	100.5	447,759.2	476,009.0	106.3
スイートコーン	722.2	707.1	97.9	10,021.1	9,188.3	91.7
かぼちゃ	527.0	520.1	98.7	6,882.5	7,427.6	107.9
その他	6.4	5.1	79.7	215.9	204.0	94.5
果菜類計	1,255.6	1,232.3	98.1	17,119.5	16,819.9	98.2
にんじん	1,137.1	1,094.3	96.2	47,137.9	43,750.4	92.8
だいこん	99.3	69.0	69.5	3,367.1	881.2	26.2
ごぼう	130.5	105.9	81.1	2,788.8	2,475.7	88.8
ながいも	133.9	115.9	86.6	2,317.7	3,162.8	136.5
かぶ	12.0	12.8	106.7	218.0	155.0	71.1
根菜類計	1,512.8	1,397.9	92.4	55,829.5	50,425.1	90.3
果実的野菜計	8.1	8.1	100.0	209.9	191.4	91.2
その他野菜	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
野菜計	10,373.3	10,272.2	99.0	520,918.1	543,445.4	104.3

資料:北海道農政部「主要野菜作付実態調査」

管内主要野菜市町村別作付割合(令和2年産)

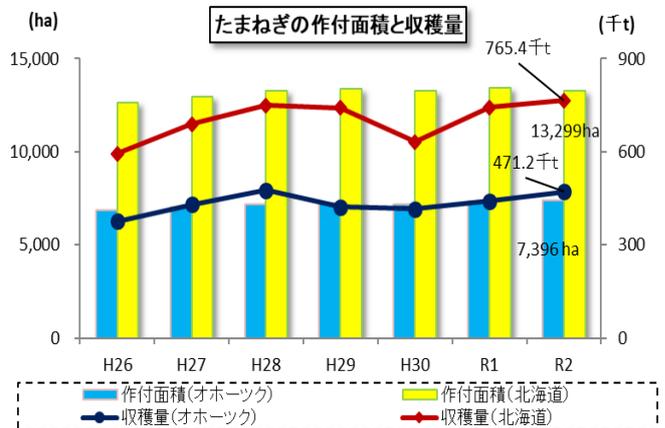


資料：北海道農政部「主要野菜作付実態調査」  
※四捨五入により合計値と内訳が一致しないことがある。

○ たまねぎ

管内のたまねぎの作付面積は全道の約55%の面積の栽培は占め、全国一の産地となっています。近年では、一次加工による高付加価値化、契約取引の推進や長期出荷の取組、集出荷体制の効率化など、さらなる産地強化に向けた取組が進められています。

令和2年産のたまねぎは生育、球肥大ともに順調に進み、収穫期も比較的好天に恵まれたことから収穫作業は平年よりやや早く終了しました。作付面積は前年とほぼ昨年並みの7,396haでしたが、収穫量は471.2千tと前年をやや上回りました。

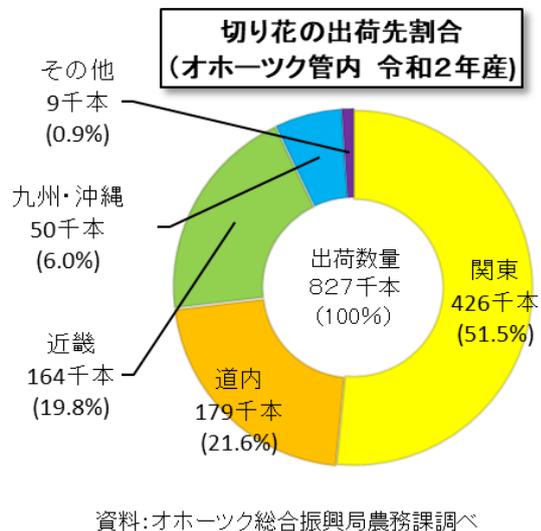
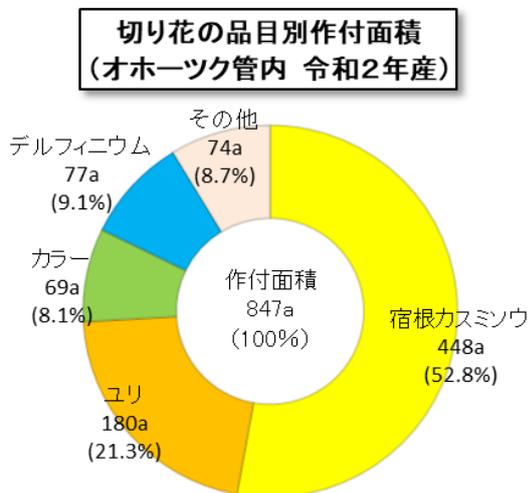
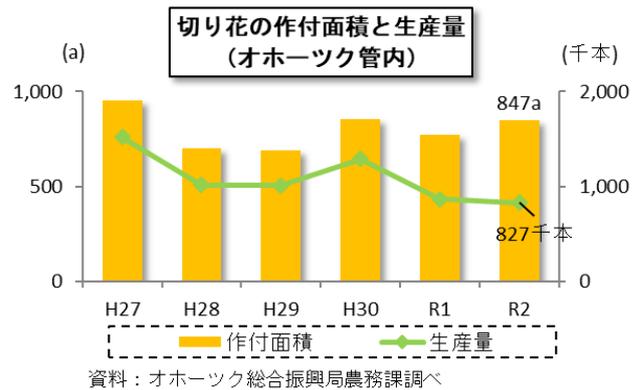


## (2) 花き

管内では、冷涼な気候を活かした花き生産が行われています。切り花の生産面積は大空町が管内の63%を占めており、その他、小清水町、美幌町、斜里町、北見市、津別町、清里町でも生産されています。また、花木類も一部市町村で栽培が行われています。

令和2年の切り花の作付面積は847aで、宿根カスミソウ、ユリ、カラー、デルフィニウムで管内の約9割を占めています。

出荷先は、道内が21.6%を占めており、道外については、関東圏に51.5%、近畿圏に19.8%、九州・沖縄圏に6.0%、その他0.9%となっています。



## (3) 果樹

管内では、りんご、ぶどう、おうとう（さくらんぼ）などが栽培されており、主な生産地は、りんごは北見市、ぶどうは北見市や置戸町、おうとうは北見市や網走市となっており、果樹園の中には、収穫体験ができる観光農園もあります。

また、近年の新たな動きとして、醸造用ぶどうの栽培とともに、ワインの醸造をおこなうワイナリーがオホーツク管内でも作られています。

#### (4) 特用作物等

管内では、冷涼な気候を活かし、香料向けの青しそ・はっか、薬用作物であるセンキュウ、トウキなどの特用作物が栽培されています。

このうち、開拓期から生産されているはっかは、昭和10年代には世界の80%のシェアを占め、その後合成香料の登場などにより、作付面積は大きく減少しましたが、近年は、加工食品の原料としての需要が高まっています。

青しそは、香料メーカーとの契約により北見市や遠軽町で主に栽培されており、しそ油として出荷されています。センキュウ・トウキなどの薬用作物は、主に網走市で、生薬会社との契約栽培が行われています。

特用作物等の作付面積（令和2年、2ha以上）

品 目	作付面積 (ha)	作付市町村
センキュウ	15.6	網走市
トウキ	2.3	網走市
しそ	100.0	北見市、佐呂間町、遠軽町
和種はっか	5.7	滝上町

資料：オホーツク総合振興局農務課調べ

# VI 酪農・畜産

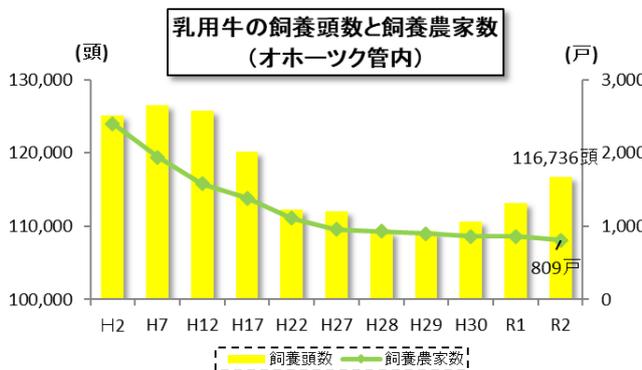
## 1 酪農

### (1) 乳用牛

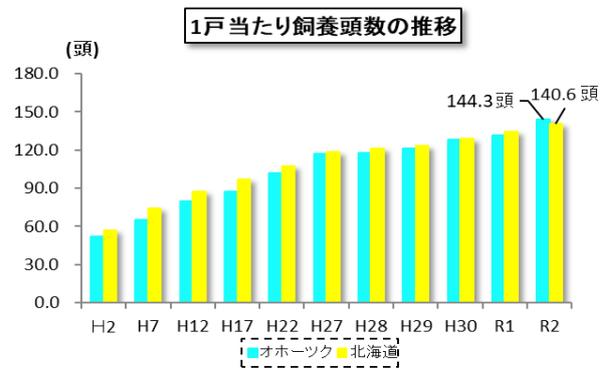
令和2年の管内の飼育戸数は809戸となり年々減少していますが、飼養頭数は11万6,736頭と近年増加しているため、1戸当たりの飼養頭数は年々増加し、規模拡大が進んでいます。

規模拡大に伴う労働過重や担い手の減少等の課題に対応するため、搾乳ロボットなどの省力化機械の導入、酪農ヘルパーやコントラクター、TMRセンター、哺育・育成センター等の営農支援システムの整備を進めるなど、ゆとりある酪農経営を実現する取組がすすめられています。

特に、近年、搾乳ロボットは省力化の面から導入が進んでおり、管内では令和2年2月現在67戸（道農政部調べ）で利用されています。



資料：農林水産省「畜産統計調査」  
ただし、H22以降については、オホーツク総合振興局農務課調べ

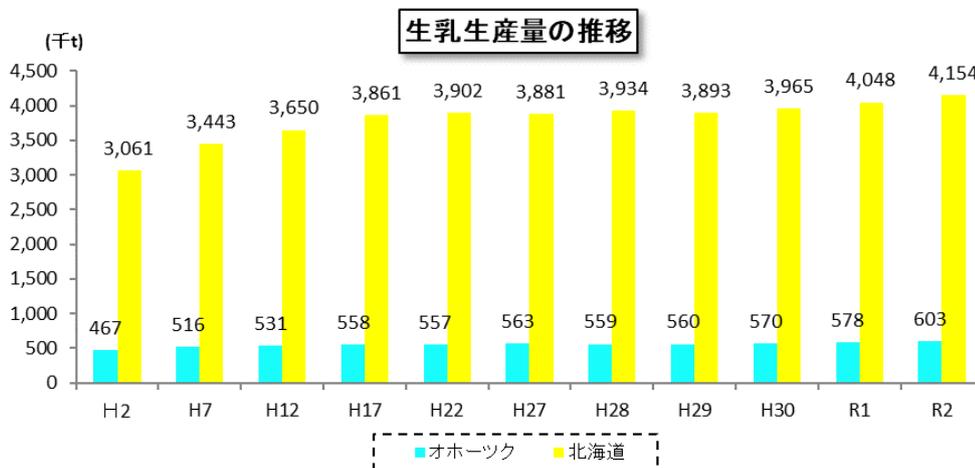


資料：農林水産省「畜産統計調査」  
ただし、H22以降のオホーツクについては、オホーツク総合振興局農務課調べ

### (2) 生乳

令和2年の管内の生乳生産量は、全道の14.5%を占める60万3,134tとなり、前年対比では104.3%となりました。

安全・安心な生乳を提供するため、生産者や農協、乳業メーカー等の関係者により、良質乳の生産に積極的に取り組んでおり、体細胞数や生菌数は低い水準を維持しています。



資料：農林水産省「牛乳乳製品統計調査」  
ただし、オホーツクについては、ホクレン北見支所の受託乳量